

松下国際財団 研究助成 研究報告

【氏名】橋爪絢子

【所属】(助成決定時) 筑波大学大学院 人間総合科学研究科

【研究題目】アジア諸国の高齢者における携帯電話利用と社会関係資本
-社会文化的背景をふまえた比較分析-

【研究の目的】

本研究では、居住地域や世代による携帯電話の利活用における格差の問題を解決することを目的とする。そのために、高齢者における携帯電話の利用実態調査を行い、文化や生活、価値観と携帯電話の利活用のかかわりを明らかにする。また、携帯電話の利用の仕方に加えて、個人の基本的な価値観や生活満足度、利用場面において重視する要素、および製品(携帯電話など)を購入する際に重視する要素などについても尋ねる。それにより、個人の価値観や生活満足度が携帯電話の利活用にどのように関与するのかを把握するとともに、居住地域や世代による携帯電話の活用能力における格差の問題を解決させる。

本研究では、携帯電話の利活用が活発でない高齢者を対象とするが、世代による比較を行うために高齢者以外の世代にも調査を行う。また、日本国内における居住地域による文化の違いだけでなく、国家としての文化の違いにも着目しながら、高齢者の生活と携帯電話の利用の実態を把握するための調査を行う。

【研究の内容・方法】

インタビュー(半構造化面接)の手法を用いて、主に高齢者を対象に調査を行った。インフォーマントの疲労軽減やラポール形成のために、1回最大2時間として2度に分けて行った。実生活環境の観察やインフォーマントの緊張や疲労などを考慮し、訪問調査の形式をとった。また、日本国内での調査においては地域差を考慮して都市部と地方都市の2箇所を実施した。調査協力者は全体で76名、構成は次のとおりであった。

- ・日本：高齢者〔32名：都市部・地方都市より各16名(それぞれ60代8名、70代8名、男女半数ずつ)〕
- ・日本：若年者〔32名：都市部・地方都市より各16名(それぞれ20代の男女8名ずつ)〕
- ・シンガポール：高齢者〔4名：60代2名、70代2名(男女半数ずつ)〕
- ・シンガポール：若年者〔2名：(20代の男女)〕
- ・米国(ミネソタ州)：高齢者〔4名：60代2名、70代2名(男女半数ずつ)〕
- ・米国(ミネソタ州)：若年者〔2名：(20代の男女)〕

インタビュー調査の内容、および順序は次のとおりであった。まず、インフォーマントのライフストーリーや家族構成、携帯電話の利用歴や利用経緯をうかがった後、価値観について(価値指向性尺度(酒井ら, 1998)を使用)尋ねた。その後、各種情報通信メディアの保有状況とそれぞれの利用頻度を尋ね、さまざまなコミュニケーション手段の使い分け方について尋ねた。また、生活の満足感を尋ねた(WHO/QOL 短縮版(田崎ら, 1997)と生活満足度尺度 K(古谷野, 1983)を組み合わせたものを使用)。基本的にはこの順で質問をしたが、会話の流れによって適宜順序は変更した。なお、心理尺度を用いる場合にも、全質問項目を調査者(申請者)が読み上げ、全て口頭で回答してもらった。調査説明時に了承を得て、全会話を録音した。その音声データを書き起こし、グラウンデッド・セオリー・アプローチを適用して分析を行った。

【結論・考察】

貴財団の助成により調査が実施できた3カ国の比較によって、次のような特徴が示された。日本やシンガポールの高齢者は米国の高齢者と比較すると、携帯電話のメール(eメール/SMS)など通話以外の機能をあまり活用していない。この背景には、米国ではPCによるインターネットの普及時期が早く、メールというコミュニケーションメディアに抵抗が低いことが考えられる。しかしながら、日本の都市部の高齢者の中には携帯電話のメールを活用しているケースも見られた。その場合には、子どもへの連絡に用いる必要性があったことや、操作の仕方を子どもから何度も教えてもらったなどの背景があった。また、メールの利用をしているか否かにかかわらず、携帯電話の操作に困った場合に、日本とシンガポールの高齢者は子どもから操作を覚えてもらうなど支援を受け、特に子どもと同居している場合にその頻度が高かった。米国では子どもと同居しているケースはなく、取扱説明書などを読んだり自身で試行錯誤したりして解決していた。